



## 黄銅製・ブラスバンド

通りの両側約2kmにわたる榊並木の保護柵としてブラスバンドを設置



楕円形と円形、約3mm厚の黄銅を2本組み合わせてデザイン



美しいカーブは、ちょっとした遊び心。表参道の街のイメージと溶け合う



理事長 松井 誠一氏

「さらに、先人たちが築いて来たこの街のイメージにマッチするものと依頼したところ、銅を使い美しいカーブを描くデザインができ上がりました。あれから十五年、銅の味わいも増し、いまやこの街の欠かせない風景となっています」

来街者がブラスバンドに腰掛けて談笑する姿をうれしそうに見つめながら、松井氏はそう語ってくれた。

日本の最新モードを世界に発信する街表参道。この街のシンボル、榊並木は、大正九年の明治神宮の造園に伴い、翌年に二〇一本の榊が植樹されたのが発端。中には樹齢九十年というものもある。実は、この榊並木の保護柵が、ずっと気になっていた。柵なのに、曲がりくねったカーブを描き、しかも多くの人が、ベンチのように腰掛けていた。これは柵？それともオブジェ？この疑問を解くため商店街振興組合「原宿表参道榊会」の理事長 松井氏のもとを訪ねた。

「この柵は『ブラスバンド』と呼ばれているんですよ。平成五年に東京都、渋谷区の表参道修景事業がスタートしますが、それに先駆け地元商店会がブラスバンドを設置しました。石畳や街路灯、そして榊並木の保護を考え、この黄銅製の保護柵も設置しました」

樹木保護用の柵なら、こんな形でなくても良かったのでは？

「最初は、ショッピングの合間に寛げるオープンカフェのようなスペースを造りたかったのです。しかし法規上、歩道にベンチを設置することはできない。そこで保護柵にひと工夫できないかとデザインを担当いただいた杉村氏に相談しました」

なるほど、座れることも大切な機能の一つだったのだ。

「さらに、先人たちが築いて来たこの街のイメージにマッチするものと依頼したところ、銅を使い美しいカーブを描くデザインができ上がりました。あれから十五年、銅の味わいも増し、いまやこの街の欠かせない風景となっています」

# 日本発、世界へ「最新モードを発信する街」 東京・表参道



## 原宿表参道榊会

昭和48年、表参道と神宮前交差点両側の明治通り沿いを区域とする「原宿シャンゼリゼ会」が設立された。平成11年に通りの顔である榊(ケヤキ)並木にちなみ「原宿表参道榊会」と名称を変更。現在会員数は230社、800店舗。長年にわたり地域活性化のために環境整備活動、催事・イベント活動、広報活動などを展開している。



## 表参道という街の風景のひとつに

●株式会社パブリックアート研究所 代表理事 杉村 荘吉氏

「来街者が自然に腰をおろし、会話を始める。そんなシーンを想像した時、ちょっとした遊び心が必要だと直感しました。独特のカーブを描くことで、ブラスバンドはただ座るだけの機能一辺倒なものから、表参道というモダンな街に溶け込んだデザインの一部になりました。こうした意匠性も加工性に優れた銅を使えば容易に実現することができました。また、銅を使うことで、抗菌性による衛生面も配慮できています」



# 京都・縄手通り

日本発、世界へ「京都人らしさを伝える街」



## 祇園縄手繁栄会

「祇園縄手繁栄会」は、三条通り～四条通りの間約500m・70店舗で構成される商店街だ。古美術商の数は京都屈指、祇園飲食店街としても広く知られている。商店街の真中にある祇園新橋は、国の伝統的建築物群保存地区にも指定され、最も祇園らしい町並みとしてTVや映画のロケにも度々使われている。



祇園四条駅を出ると、賑やかな四条通りに目を奪われがちだが、そこからちよと脇道に逸れて三条駅の方へ足を向ける。そこには、観光地・京都とはひと味違うたたずまいを持つ商店街『祇園縄手繁栄会』がある。『縄手』とは、土手道のことで、この通りはかつて鴨川の土手沿いに位置していた。この商店街の新しい顔となっているのが銅製の置き灯ろうだ。早速、祇園縄手繁栄会の秋山会長にお話を伺ってみる。

「昨年、京都市に長年要望してきた道路整備が実現し、歩道が石畳（インターロッキング）に変わりました。それに合わせ古く痛んだ商店街の電飾看板を取り外し、もつと縄手通りらしいものを作ることに……。そんな時、ある組合員の店先にあった銅製の置き灯ろうを見て「これだ！」と閃いたのです」

近年、話題になっている花灯路（はなとうろう）も参考にして、全部で五〇基の銅製の置き灯ろうを製作された。

「銅の置き灯ろうの良いところは、程よい手間がかかることですね。放っておくとくすんでしまうが、磨き過ぎても良くない。そんな愛着ある置き灯ろうを、毎夕、みんなが店先に並べていく、この毎日の仕種こそが、京都人らしさです」。

夕闇が京都の街を静かに包みはじめる頃、あちこちの店先に銅の置き灯ろうが並べられ、その一つひとつに明かりが灯されていく。それは縄手通り商店街の人々のいつもの営みとして、はんなりと溶け合っていた。



会長 秋山 敏郎氏



## 銅製・置き灯ろう

銅の置き灯ろうは、50軒の組合員のそれぞれの店先を飾っている

昼は穏やかな古美術商の街。夜は華やいた飲食街へと表情を変える

### 京都人こだわりの素材＝銅

●京都市板金工業組合 理事長 田原 茂氏(右)／監事 西嶋 豊氏(左)

「板金業界では、昔から京都人好みの素材といえば銅なんです。この商店街は、さらにこだわって銅板の地の色そのまま活かした置き灯ろうを作りました。年月とともに自然に銅の味わいが増すようにとクリアもかけていません。さり気なく本物にこだわる、それが京都人なんです」

